
一瞬の幸せ

棗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一瞬の幸せ

【著者名】

ZZマーク

N7380D

【あらすじ】

平凡な生活に満足している主人公桐夜は、ある日突然一人の女子と出会い、平凡でない生活を味わされる事になってしま……。
波瀾万丈で少し非常識な学園生活を描く物語です。

棗

1st story「出でて」

僕はこの平凡な生活に満足している。

そもそも、平凡な生活に満足していない人物なんているのだろうか。
万が一いたとしても、ほとんどの人が我慢しながら平凡な生活を送
っているだろう。

そう。平凡でない生活を送れる人はそうそういない。

そのはずだ…。

そのはずだった…。

9月1日。

夏休みがあけ、学校が始まる日だ。

決して皆が皆学校に行きたい訳ではない。

しかし、皆が学校に行く。

これが当たり前だからだ。

これが平凡な者の運命だ。

「よひ、桐夜。元気にしてたかあ～？」

「普通。」

「俺なんて宿題そつちのけで遊び呆けてたぜえ～。また宿題見させてくれよー。桐夜様ー。」

「……。たまには自分でしろ。」

「なんだよケチー。」

「ケチで構わん。」

「くそー。」

「いっは金光慶介。
かねみつけいすけ。

一応中学時代からの友達だ。

あえて親友とは言わない。

「で？ 夏休みの間、何した？ 俺はいろんな所に遊びに行つたぜえ～。」

「別に。」

「別にってなんだよー。つまんないやつだなー。」

「つまらなくて構わん。」

「くそー。何か負けた感じがするー。」

「……。」

何故負けた感じになるのか僕には分からぬ。

「じゃ、また学校で会おうぜー。」

そう言つて顎け出していく慶介。

何故ここまで元気なんだ？　あいつは。

学校に着き、自分のクラスに戻る。

いつもと変わらない2年C組の連中。

「おはよー。久瀬君^{くぜ}」

「おはよう。」

「久しぶりだねー。元氣にしてたかい？」

「普通。」

「そつかあー。普通かー。私も普通だったかなー。」

こいつは、和泉由希。
わいすみ ゆき。

妙に僕こいつかかつてぐるよく分からないやつだ。

どことなく性格が慶介に似ているような気がするが、どうして僕の周りにはこういうやつばかり集まるのだろうか。

僕と軽く話をした後、和泉は友達の輪の中に入つていった。

忙しいやつだ。

学校のチャイムが鳴り、朝のHRが始まる。

ここで転校生でも来るもんなら、多少は面白味があつただろうが、残念ながらそんな事は起こる筈もなく、普通にHRは終了した。

そして、体育館に全校生徒が集まる。

いわゆる始業式だ。

これも軽く終了した。

そして放課後。

「さてさて。桐夜様。宿題の方は……」

「たまには自分でやかつてこつ『持ちは無い』のか?」

「無いです。」

「…………呆れた。ほり、貸してやるよ。あと、僕は帰るから、僕の分も出しといてくれよ。」

「あやーすー! あ、やいや一桐夜はやっぱり部活入らないのか?」

「興味ない。」

「お前は一体何になら興味が沸くんだあ?」

「ああな。自分でも分からん。」

「なんか趣味でも作つたらどうだ?」

「…………。」

「じゃあな一桐夜ー。宿題サンキュー。」

「ああ。じゃあな。」

僕は無言で学校を後にした。

「そういえば、冷蔵庫の中身が空だったな。」

僕は帰り道の途中にあるスーパーに寄ることにした。

特に食べたいものがあるわけでも無かったが、一番にカレーが目に入つたので、とりあえずカレーを買って帰った。

「ただいま。」

家から返事はない。

そもそも家から返事が帰ってくる方が驚きなのだが…。

何故なら両親は他界しており、姉は既に家庭持ちでここには住んでいない。

もう一人姉がいたが、今ではどこにいるかも分からない。

つまり、実質ここで一人暮らしをしている。

僕はいつものように、学校の予習をさうっと終わらせ、夕食であるカレーを作つて食べ、すぐにバイトに出かける。

周りには一人暮らしをしていることは隠しているので、バイトに行つてることも当然誰も知らないであろう。

僕が部活に行かない最大の理由はこれである。

僕がバイトをしているのは、ひと夫婦が経営している小さなファミレスである。

僕は一応ウエイターということになつてている筈なのだが、料理が得意なので、人手が足りないときは、よく料理も作っていた。

そのせいか、夫婦とはとても仲が良く、給料も、高校生にしてはなかなか良い。

もしかしたら、普通のバイトよりも高いかもしない。

「今日はあまりお客様さんが来ないと思つから、ウェイターをお願いするね。」

「分かりました。」

あまり来ないといつのは、実質全くに等しいほど人が来ないのである。

だから僕は結構暇だった。

そして、営業時間終了間際に、一人の女の子が入ってきた。

「いらっしゃいませ。一名様ですね。」

「…………。」

「いらっしゃいませ。」

僕は何故返事が返つて来ないのかと思ったが、普段通りに彼女を席に案内した。

僕は元々明るい性格ではないので、営業スマイルといつもの出来ないでいる。

「『』注文がお決まりになりましたら、お呼びつけ下さい。」

このフマミレスには、便利な呼び出しボタンなどがない。

しかし、一部の常連さんはそういう雰囲気が好きだと言っていた。

店の中には、もう彼女しか残っていない「えー、ア」と

11時ところ比較的遅い時間にやつてきた事もあつてか、つい彼女の方に目線がいく。

彼女は白のワンピースを着ていて、またまた真っ白な鞄を持つていた。

それが長い黒髪を際立たせている。

なかなかに美人でもある。

彼女は少しおどおどしてこちらによつて見えた。

もう一年ほどこのフマミレスでバイトをしているが、彼女の顔に見えがないため、

きっと初めて入ったファミレスに遊びに来ただけだと思つていた。

しかし、30分たつても彼女はウエイターを呼ばない。

メニューをずっと見続けている。

流石に気になつたので、彼女に声をかけようとした時…。

「あ、あのー。」

「はい。なんでしょう。」

「この料理は、お金が無かつたら食べられないんでしょうか?」

「はい?」

そんな事は当たり前のよつな気がするのだが、とりあえず冷静に対応した。

「はい…。お金はいりますよ。失礼ですが、お客様は今何円お持ちなのでですか?」

「128円しか持つてないです…」

「ひ、128円!…?」

「お腹は空いでいるのですけど、お金を持ってないんです…。どうすればいいですか?」

とりあえず「家に帰つたらどうですか、と言いたくなつたが、何やら訳ありの様子だったし、そもそも何故ファミレスの原理を知らないのかという所に興味がわいたので、僕は軽い気持ちで答えた。

今思つと、この時こんな事を言わなかつたら、今でも平凡を満喫出来ていたかも知れない。

「それでしたら、僕の家に来ますか？ 軽くでよかつたら、『』馳走しますよ。」

まあ、こんな事を言つても、のこのここんな見ず知らずの男の家なんかには来ないだろ？ と僕は思つていた…… のだが。

「ぜひお願ひしますーーー！」

「…………、はーい？」

僕は、まさかそんな返事が帰つてくるとは思ひもしなかつたので、つい停止してしまつた。

「や、やつぱり迷惑ですか……？」

「い、いや。僕から振つたんだから、せりんといじ馳走します。」

「あ、ありがとうございますーーー！」

やれやれ……。

面倒な事になつてしまつたと僕は半ば後悔し始めた。

そして、バイトが終了した。

「じゃあ行きましょうか。えーっと…。」

「滝山未来です。未来って書いて、みくつて読みます。あなたの名前は？」

「……。久瀬桐夜です。」

「よろしくね。桐夜君。」

「ひちりこわ。滝山さん。」

「私のことは未来って呼んでいいよ。」

「いや。滝山さんでいいです。」

「えー。何で？ 恥ずかしがる必要は無いってー。」

なんでこの人は突然元気になっちゃってるのだろうか…。

「いや。いいです。」

「あと、他人行儀にしなくてもいいよ。桐夜君。」

「いつからあなたは他人じゃ無くなったんですか？」

「今。」

「…………。明日には戻りますよ。わざと。」

なんせあんたがいなくなるからね。とか思つてゐる自分が自分が自分じゃないように思えてくる。

「なにはともあれ、よろしくね。桐夜君。」

「いちいちや。滝山さん。」

「未来一。滝山さんじやあ他人行儀じやん。」

「僕は元々こんな人間ですから。」

やれやれ。

本当に面倒な事になりそつた。そつ思いながら、帰路についた。

「ただいま。」

「本日一回目だ。」

「お、お邪魔します。」

滝山さんはかなり慎重になつてゐるように見えた。

「別に大丈夫。どうせ中には誰もいませんから。」

「えつ……？ じゃあ桐夜君は一人暮らし！？」

「はい。」

「へえ～。」

よく思えば、誰もいない方が問題だったのかもしれない。

「まあ、上がつてください。」

「お邪魔しまーす。」

僕は彼女を居間へ案内した。

彼女と話していると、つい他人行儀になってしまふから、とても疲れる。

それに比べると、彼女はいやに元気だ。

店で見せたあの感じとは全然違つ。

こっちの方が彼女の元々の性格なのだろう。

まったく。なんで僕の周りには本当にこういつ奴が集まつてくるのだろうか。

まあ、それも一晩の仲だと思つてしまえば、大分気は楽だった。

「ちょっと待つてください。」

僕は晩のカレーを作り始めた。

元々一人分しか作らないので、実質いちから作る事になる。

「ねえねえ桐夜君。」

「なんですか？」

「桐夜君って学生だよね？ 高校生？」

「はい。一年生です。滝山さんは、僕と同じか少し上という感じで見えますけど。」

「…………。じゃあ私は君と同一年だね。」

「そうなんですか。」

「うん……。」

なんだ？ ほんの少し俯いてるぞ？ 何か訳ありなのだろうか。

ここはあえて追求しないことにした。

「滝山さんはカレーお好きですか？」

「もひ。同じ年なんだから、さんは止めてよー。」

「そ、そうですか？」

僕は女の子を呼び捨てで呼ぶことが無いわけでは無いのだが……。

「滝山さんより未来つて呼んだ方がいいですか？」

「勿論……」

「じゃあ、未来はカレーは好きか？」

「うん……」

かなり恥ずかしかったのだが、まあ、今日ぐらいは我慢しよう。

未来はカレーをかなりのスピードで食べていった。美味しいとは言っていたが、本当に味が分かっているのか…。

「」馳走様。おいしかった。ありがとう、桐夜君。」

「いやいや、そんなに美味しそうに食べていただき、嬉しいですよ。」

「そういえば桐夜君は何で一人暮らしだしてるの？」

「両親は僕が小学校の時に他界して、姉達は嫁いだり、行方を眩ましたりしてます。だから、取り残されたつて感じですかね。」

「へえ。そなんだ。もしかして悪いこと聞いたやつた？」

「いえ。全然大丈夫ですよ。」

「え…、えーっとね、実は私、学校に行つてないんだよね。」

「そ、そつなんですか？」

「まだ。また俯いてる。自分の素性を知られたくないタイプなのか？」

「話したくなれば別に構いませんよ。」

「……。」

「あ、もう1~2時回りますよ。そろそろ帰った方がいいんじゃないですか？」

「そうだね。そろそろ帰ろうかな。」

未来は立ち上がり玄関まで歩いていく。

「今日は本当にありがとうございました。」

「いえいえ。僕も楽しかったですよ。送つて行かなくて大丈夫ですか？」

「大丈夫だよー。」

「そうですか。」

「じゃあねー。またいつか会えるといいねー。」

「はい。また会えるといいですね。」

正直、また会えるといいなと思えていた。

こんな僕は珍しい。

初めに会つた時は会えなくて全然構わないと思つていたが、今は、未来に少し興味がわいた。

初めから興味はあつたのだが、話をしてみて、ますます興味は増していった。

「じゃねー。桐夜君。」

「ああ。」

そう言つと、未来は暗闇の中を去つていった。

正直、実質高校生二年生が0時回つての帰宅はマズいのではないかと思つたが、11時にファミレスに来ていたぐらいなのだから大丈夫だろ?と思つた。

「さて。これで普段の生活が戻つてくるな。」

他人行儀な喋り方は疲れる。

明日からは普通通りの生活が送れると思うと、何故かホッとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380d/>

一瞬の幸せ

2010年11月17日05時06分発行